

経

営

軸

線

自動車の走行性や安全性を調べる「テストコース（自動車試験場）」。NIPPOは40年以上にわたって設計や施工を手掛け、「日本にあるテストコース舗装の95%の設計施工実績」という圧倒的な強さを誇る。米国や欧州など海外での施工経験も豊富で、同社の特徴的な分野の一つになっている。舗装技術の最先端を歩むテストコースの現状を調べ、建設を支える専門集団の声を拾うことで強みの秘密に迫る。

■独自の進化遂げる

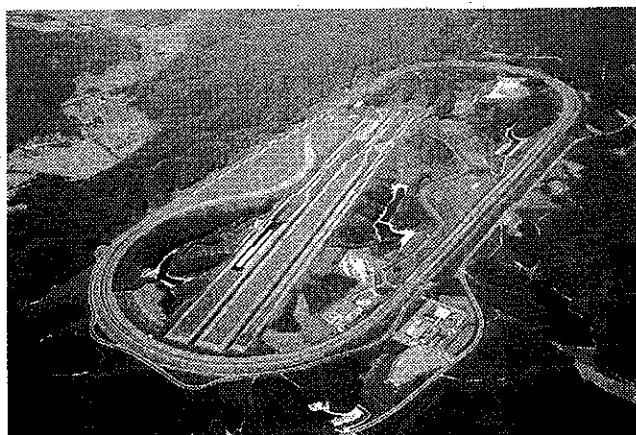
日本のテストコース

全国には約50カ所のテストコースがあり、自動車メーカーや部品メーカー、日本自動車研究所（JARI）などが所有している。渡辺雅夫執行役員技術開発部長は「テストコースは大きく2種類に分け

NIPPOのテストコース①

られる」と話す。第1は新しい車を生み出すための開発用、第2は工場で製造した車をチェックするための品質管理用だ。

「テストコースの施設内容は、所有する企業ごとの違いでそれほど大きくない」（高橋幸男舗装事業本部生産技術機械部生産機械グループ施工指導マネージャー・リーダー）という。工場の立地や多様な気象条件に対応できるように複数のテストコースを持つ自動車メーカーは多い。



JARIのテストコース

■総合力生かして曲線、直線施工
テストコースを施工する上で特に技術力を要するのが、「高速周回路」だ。カーブするバンク部は最大で50度ほど傾いているほか、幅員方向で曲線になるなど形状は複雑極まる。「バンク部はお椀型になるため、特殊な形状に対応した専用の建設機械を使う」（塚本幸裕舗装事業本部生産技術機械部生産機械グループ特殊路面施工チームリーダー）。

また、日本のメーカーは狭い土地で効率的に試験できるようにバンクなどを設けるのに対し、「海外は広大な敷地に実際の道路に近いコースを造り、そこでテストするのが一般的（渡辺執行役員）」などから、日本のテストコースは独自の進化を遂げてきた。また、日本のメーカーは狭い土地で効率的に試験できるようにバンクなどを設けるのに対し、「海外は広大な敷地に実際の道路に近いコースを造り、そこでテストするのが一般的（渡辺執行役員）」などから、日本のテストコースは独自の進化を遂げてきた。

舗装技術の最先端を歩む

求められる高精度に全力

を組み合わせ、初めて高速周回路の建設は実現する。■発注者ごとに情報管理を徹底

NIPOは設計から施工まで一貫して事業者と綿密に連携、ニーズに合ったテストコースを建設してきた。専用の建機もメーカーに頼らず、自らで設計し、改良を重ねることで独自の強みにまで育て上げた。また、情報化施工を積極的に取り入れ、「オペレーター」の腕だけに頼るのではない」（石亀課長）施工のあたりを模索してきた。

同社にはテストコースで圧倒的なシェアを誇る故の不文律がある。「担当先の情報は社内でも共有しない」（高橋リーダー）のがルール。技術開発と密接に関連するテストコースは、自動車メーカーなど事業主にとってライバルである同業他社には知られたくない極秘の情報。「情報管理を徹底し、社員同士で情報交換しない。情報が漏えいしないことも当社の信頼につながってきた」（同）。

経

営

軸

線

ほどのテストコースが主流になり、さらに85年前後からは「カナダなどの寒冷地

にも車を販売する」(同)などのため、北海道での建設が進んだ。広い土地を確保しやすいこともあり、自動車メーカー各社は1周10^キ級の高速周回路を次々に完成させた。

平成に入ると、今度は海外での整備が増え始め、それに合わせてNIPPPOも台湾、米国、英国、メキシコ、フランス、韓国などで設計、施工や施工の技術指導を展開するようになる。

■競輪場やサーキット場などにも応用
現在は、国内テストコースの新設はほぼなく、更新や改修に主体は移っている。「テストコースは2-3年でつくりに変える。中身はどんどん変

わる」(同)。同社はフィニッシャーとローラーで構成するテストコース専用の建機を3パティーほど所有している。「テストコースの仕事はあるが共通する部分も多い」と話す。

■テストコースのプロは20人以上
NIPPPOはテストコースのプロフェッショナルを計画的に育ててきた。「1人前に

昭和40年代に入って高速周回路でアスファルト舗装の時代が到来、68年ごろには機械での施工も始まる。昭和50年代は好景気もあって1周4^キ

NIPPPOのテストコース

強みは総合力、世界に展開



コース中心のプロ＝塚本氏(左)と石川氏

輪場、サーキット場、オートレース場などの建設でも応用している。

自転車競技場・競輪場の舗装でも「国内では95%以上の施工実績」という。

塚本幸裕舗装事業本部生産技術グループ生産機械

培った技術は希少な存在

「」といい、テストコース主体の工事のプロだけで20人以上を抱えている。

塚本リーダ―や石川昇悟二ツボメックス工事部第1課長もそれぞれ100件を超す現場を経験し、テストコースのプロとして活躍する。技術の最先端を駆使するテストコースは社内でも花形的な存在。

塚本リーダ―は「テストコースにかかわれることを誇りに思う」と胸を張る。「仕事をすすんで施工の精度と安全を特に重視している」。バンクの工事は機械を吊って作業するため、特に安全面で細心の配慮が欠かせない。

渡辺執行役員は「当社の強みは誰か特定の人の力ではない。オペレーター、機械、設計、現場、営業などの総合力なしにはテストコースはできない」と総括する。世界的に見ても、高度な高速周回路を施工できる建設会社は希少な存在。海外事業の強化を掲げる同社にとって、蓄積した技術を強みとして有効に生かす。